

特集2 奄美大島の奇跡

藏座江美（一般社団法人ヒューマンライツふくおか）

完結編

三月から五月にかけて、奄美大島の三会場

（奄美文化センター、奄美和光園、

田中一村記念美術館）で、

「ふるさと、奄美に帰る」展が、開催された。

熊本療養所菊池恵楓園の絵画クラブ

「金陽会」のメンバー〇人の作品が、

海を渡り、奄美大島の地を踏んだ。



ふるさと奄美に帰る

「ふるさと、奄美に帰る」展開催のため、奄美大島に到着したのは、小雨が降る三月七日。ついに来たという喜びに加えて、静かに広がる緊張感があった。それはたくさんの方々の想いに背中を押されてここに辿りついたという責任感からのものだけでなく、金陽会のメンバーである奥井喜美直さんの妹さんに会う事になっていたからだ。

今回の展覧会で、田中一村が描いた祖母と父親の肖像画をお借りしている奥晴海さんから、「奥井さんの妹さんが奥井さんから贈られた絵を観てほしいから、藏座さんに会いたいと言っている」と、連絡を受けたのは二月の半ば、カタログの校正にてんやわんやしているときだった。

奄美出身の奥井さん、大山清長さ

んのご家族から「余計なことはしてくれないな」という連絡が入るかもしれないことは、この展覧会の開催を決めたときからずっと予想していた。そのときは、この企画は私のおせかい以外の何ものでもないで、「迷惑をおかけしたことを心からお詫びするしかない、覚悟はできていたつもりだった。しかしその予想が現実になったとき、それが奥井さんの絵を観てほしいということでも、全身に緊張が走った。加えて奥井さんが家族に絵を贈っていたという事実も、少なからず私を混乱させた。しかしすぐに何の絵を贈られたのか、奄美大島に里帰りされていたのか、とにかく聞きたいことが山ほど出てきて、緊張と興奮を抱えながら奄美大島に向かった。

ホテルのロビーで晴海さんと奥井さんの妹さんを待っていたときのことはずっと忘れないと思う。ほんの一〇分程度だったが、どんな方なんだろう、何を話そう、ものすごくヘンなテンションだったことは間違いない。妹さんは息子さんらしき人と静かに入ってこられた。

